

大人が絵本を 第57回 絵本の価値、



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*
小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

諭吉さん、お世話になりました

日本全国、改元熱が冷めやらないところ、出版界をも突き動かししたのは、「令和」の典拠となった『万葉集』で、令和熱気は日本最古の和歌集にまで及んでいます。

新元号発表の8日後には、新時代の機運に便乗するかのように紙幣の刷新が発表されました。昭和59(1984)年から40年もの間、「諭吉」の愛称で暮らしに密着してきた福沢諭吉図柄の1万円札の刷新は、世代交代のような寂しささえ感じられます。令和6(2024)年にお目見えする新1万円札は、「渋沢さん」と呼ばれるのでしょうか、「栄一さん」でしょうか。新しい5千円札は、女性教育の先駆けとなった津田梅子女史に、千円札は医療界では馴染みの深い、近代医学の基礎を築いた北里柴三郎氏に変わる日が近づいています。時代の流れを見計らったのか、新しい顔ぶれの3人は、共に昭和まで存命し活躍した偉人が連なりました。改元となった平成天皇の退位と新天皇即位しかり、世代交代は世の宿命です。子どもたちが、1万円札や5千円札を使用する機会はずいぶん減りますが、紙幣が刷新されると大人でも戸惑ってしまいますから、新旧紙幣の図柄を子どもたちと一緒に確認しあったり、紙幣の移り変わりを学んだりする好機でしょう。キャッシュレスの時代だからこそ、お金について親子で学び合うことに大きな意味があるのです。

平成の31年が終わり、親子共に平成生まれの家族も多く見受けられるようになりました。紙幣の歴史や、大切なお金の価値を伝えることは、昭和のバブルとその崩壊を経験してきた大人の役割となってくるでしょう。

ほしいものは、何でも手に入るの？

「100万円がほしい」(小4男の子)

「ゲームが100個ほしい」(小3女の子)

これは3年前のクリスマスに、ビブリオ会員年子の兄妹がサンタクロース宛に書いたお手紙です。その年、この兄妹の家にサンタさんは訪れませんでした。

お金や品物は、欲しいと欲するだけで簡単に手に入るわけではありません。両親が働いて得られたお金は、家族の衣食住の暮らしと、子どもの習い事、そして、時々のレジャー費に、それはそれは上手なやりくりによって運用されています。それなのに、わが子の度を越えた欲求に、親御さんは怒り心頭に発し、「そんな贅沢を言う子のところにサンタクロースが来てくれるわけがない」と、クリスマスのパーティもありませんでした。

子どもたちはその頃、小学校中学年ですので、お金の価値も理解できる年齢です。そこで差し出したのは、アメリカの絵本『かあさんのいす』でした。



『かあさんのいす』

ベラレ・B・ウイリアムズ 作・絵
佐野洋子 訳(あかね書房)

主人公のローザの家は火事にあい、家財すべてを失うのですが、隣近所からの物資支援を受けて何とか生活を取り戻していきます。つましい日常の中で、薔薇模様の椅子を買う目標をもつと、お母さんは仕事でもらったチップを、おばあちゃんは節約できたときに、ローザもお母さんの勤めているお店のお手伝いをしたときにももらえるお駄賃を半分だけ、家族3人が協力して大きなびんにお金を貯めて、椅

手にするときは！

お金の価値

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

子を買うのです。

家に住むにも、洋服を着るにも、ご飯を食べるにもお金が必要で、そのお金は勤労の対価として得られるものであり、家族の労働によって私たちの生活が成り立っていることが分かりますし、働くことの尊さと価値、働く親御さんへの感謝の気持ちも生まれるでしょう。お金の大切さと合わせて、ものの大切さも感じることができる絵本です。シャイでぶっきら棒なお兄ちゃんは、その場では反応をみせませんでした。その後、むやみやたらとものを欲しがらなくなりました。



「生きるのに必要なもの」と「便利なもの」

『かあさんのいす』には続きのお話があって、『ほんとにほんとにほしいもの』と『うたいましようおどりましよう』の三部作になっていて、このときの兄妹に投げかけるにはぴったりな絵本でした。

第2作では、「かあさんのいす」を買った後も3人で貯め続けたお金で、ローザの誕生日に「ほんとにほんとにほしいもの」を買って良いと言われるのですが、それまで欲しいと思っていたものが、ほんとに欲しいかどうか分からなくなり、考え込んでしまいます。この悩みは、ものの溢れた時代に生きる現代の子どもたちに共通するものでしょう。ローザが本当に欲しいものを見つけるまでの価値観の模索と、気づきの過程において、お母さんはさりげなく寄り添うのです。その姿もまた、親として何ができるのかを保護者自身が考える手助けとなってくれます。

相談を受けた兄妹は、思春期に向かう年頃ですので、もう一押ししてみました。絵本の後に、図鑑の要素も持ち合わせた『お金とじょうずにつきあう本』を使って、「生きるのに必要なもの」と「あると

便利なもの」、「ほしいけれど、贅沢なもの」を整理しながら、自分にとって、また家族にとって大切なこととは何かを考えました。ローザと同じように「ほしい」と「必要」なものの区分けをしていったのです。

『お金とじょうずにつきあう本』
L・ジャフェ、L・サン＝マルク 作
永田千奈 訳(晶文社)



妹ちゃんの今、「ほんとにほんとにほしいもの」、その答えはゲームソフトではありませんでした。

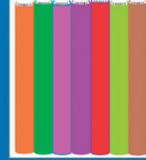


おみせやさんごっこに、お店たんけん！

紙幣の刷新など微塵にも思っていなかった今年3月初旬に行った4～6歳向け絵本と図鑑のおはなし会は、「お店たんけんしよう！」でした。『ただいまお仕事中』（福音館書店）で医師や看護師、保育士に図書館司書他、様々な職種と仕事内容を観察してから、ビブリオキッズの階下にある明太子店へ、親子一緒に探検です。

福岡県の名産品である明太子の小売店は街中に点在しており、生の明太子だけでなく、明太子を使ったお煎餅やふりかけなど色々な商品と、その値段を店員さんに教えてもらいました。

次に戻った2階では「医療法人 元気が湧く こどもの歯科」と、ビブリオのフロアである、通称“ペンギンどおり”の探検です。ビブリオキッズやラボにレジはないけれど、子どもの歯科には、明太子店と同じレジスターがあって、お母さんが受付のお姉さんにお金を渡していました。お店で品物を買うときだけでなく、歯科医院など病院で診てもらったときも



お金が必要なことを知りました。

2～4歳向けおはなし会では、桜のシーズン恒例の『ちことゆうのおだんごやさん』（学研教育出版）を読んだ後、折紙の串に刺し外しができる「おだんご」やさんを开店します。予め、保護者様に外国のお金を渡しておき、「お父さんやお母さんにお小遣いをもらって、お団子を買いに来てね」と、お話の世界をそのまま、ごっこ遊びにつなげるのです。

私たちは教育機関ではありませんので、金銭教育をしているわけでないのですが、絵本と図鑑と実体験を往来するワクワク感の中から、何かを感じてもらえればと願っています。

子どもの将来を見据えて。お金のはなし

おはなし会で「おだんごやさん」を开店すると、少数ではありますが、保護者様より「お金のことを教えたけれど、幼児にはまだ早い？」や「どう教えたらよいかわからなくて」とのご相談を受けることがあります。「子どもは未来を担う大切な“社会の一員”。子どもだからといって安易な言葉に逃げず、社会の現実をきちんと伝えることが必要」なのです¹⁾。

早い子は、2歳で10までの数が唱えられるようになりますし、4歳くらいには数の概念が理解できるようになりますので、そうすると10円玉を使って、10円20円30円の数え方も覚えられるようになります。

外出時、現金がなければ公衆電話や公共交通機関を利用できなかった時代は終わり、ICカードやタブレットで事足りる社会では、子どもたちにお金の使い方や価値を伝えるにも、ひと工夫が必要です。このような時代だからこそ低年齢の子どもたちにも、お金の存在と価値を考える機会を設ける意味は大きいのです。

『マナボーとまなぼう おかねのえほん』では、最初のページでのぞいたおばあちゃんのお財布に、紙と金属のお金が入っていて、まずは紙幣と硬貨の種類を確認することから始まります。ちょうど刷新さ

れる時なので、旧紙幣と新図柄の違いも確認してみると良いでしょう。お金がテーマの絵本は、令和6年までに改訂版が発行されることでしょうか。

100円あったら、何が買える？

日本で最初の男性保育士(当時の名称は保母)となり、その後、絵本作家に転身した中川ひろたか氏が2016年に発行した『100円たんけん』は、子どもたちにとって身近な金額の100円で買えるものを読者自ら見比べて、お金の役割や、ものの値打ちを考えながら物語が形作られていくインタラクティブなメディアです。



『100円たんけん』
中川ひろたか 文
岡田よしろう 絵
(くもん出版)



八百屋さんに行くと、100円でピーマンを5個買えるのに、トマトは1個しか買えない、お肉屋さんでは100円で買える豚の肉と牛の肉の量が違うなど、同じ100円という単位で比較することで、ものの値打ちを知ることができます。絵本で興味をもったら、実際にスーパーや八百屋で商品の値段を確認する楽しみに発展できます。限られた所持金の範囲内で買い物をする体験を親子で繰り返すことで、お金の大切さが身についていきますし、値段を知っている分、食するときに感謝の気持ちも育まれることでしょう。

お金では買えない価値がある！！

「小さくても大事なものがあるんだよ」のメッセージが籠められた『ねずみくんのチョコッキ』は、1974(昭和49)年に誕生してから45年間、愛され続けている、なかえよしを文、上野紀子絵の夫婦作家が紡ぐ「ねずみくん」シリーズです。誕生から30年後の2004(平成16)年に発行された『ねずみくんのプ

プレゼント』は、ねずみくんのガールフレンドねみちゃんの誕生日のお話です。ねみちゃんは、お友だちに貰ったプレゼントの中で、ねずみくんの風船が一番大きくて大満足なのですが、徐々に縮んで小さくなり、最後は割れて、がっかりします。でも、割れた風船の中に入っていたものは、お金では買えない貴重な贈り物でした。ものには大きな価値があり、同時に、お金では買えない価値が存在することを楽しく知ることができます。

『また、ねずみくんのチョコッキ』で、ねみちゃんはねずみくんの赤いチョコッキを台無しにしてしまいますが、お金を使って解決しようとはしませんでした。お金で買うことのできない価値と、そしてお金ではなく工夫して代用することや、気もちという価値も教えてくれます。ねずみくんたちは、「お金」ということに触れていないけれど、ものの価値が示されているのです。

45年読み継がれているロングセラーシリーズの最新作『ねずみくんのうんどうかい』が2018年9月に出版されたのを見届けた上野紀子氏は、令和時代を待つことなく、2019年2月28日ご逝去されました。「ねずみくん」は、昭和から平成、令和、そして、次の時代へと読み継がれ、子どもたちの心に生きる力を育み続けてくれることでしょう。

ものあふれた時代に、健全に生きるとは

子どもには、お金の苦勞のない人生を歩んでほしいと願うのが親心でしょう。将来、自ら生計を立てたときに金銭問題で不幸にならないよう、親元で過ごす幼少期より、お金の知識を日常生活の中で身に付けていくことが、お子様の健全な成長と将来の助けとなるのです。その際、お金の使い方や価値だけでなく、お金では買えない大切なものの視点も重要です。現代版「わらしべ長者」ともいえる『どうぞのいす』(香山美子作)など、お金をテーマとしているわけではないけれど、ものの価値を見出す絵本はたく

さんあります。子どもへの橋渡し役は、大人の皆さまなのです。

本連載に長らくお付き合いいただいている読者の皆さまにはご納得のことと思いますが、絵本は本当に不思議な力を備えていまして、深く読み解くほどに、一見したテーマとは全く別の、魔力のようなパワーがフツフツと湧き上がってくるのです。だから、「大人こそ、絵本」、そして「子どもと読みあう絵本」なのです。

大人の姿が、子どもたちの生きる力に！

文春新書の最新版『キャッシュレス国家』のはじめで、「2019年は後に“キャッシュレス元年”“モバイル決済元年”と呼ばれるようになるかもしれない」と記されています²⁾。クレジットカードやペイなどデータ決済の時代とは、ともすれば大人でも金銭感覚が鈍くなる危険性をはらんでいます。お金は、使う人次第で人生を豊かにしますし、転落にも追い込む表裏一体の二面性を持ち合わせています。子どもにお金や経済のことを伝える前に、大人が学び直すことから始めてみませんか。

「お金を知る」といっても、お金の役割から、ものの価値、そして働くことと労働の価値など、その観点は、政治、経済、文化、歴史等々、多岐に発展します。決済方法が大きく変化している時代においては、私たち大人が、いろいろな本に触れる機会をもちたいものです。変容する社会に惑わされず、取り残されないために、ものごとの真髄を自ら審議する行為こそ、この時代に重要なことではないでしょうか。大人が本や絵本に触れる姿そのものを、子どもたちにどんどん見せていこうではありませんか。



文献

- 1) L・ジャフェ、L・サン＝マルク作、永田千奈 訳：お金とじょうずにつきあう本、晶文社、東京、2001 p.50.
- 2) 西村友作：キャッシュレス国家(文春新書)、文藝春秋、東京、2019、pp.3-8.